

理想の弁護士像

会員 鈴木 恭平

3月の半ば、翌朝の期日のために札幌を訪れた。豊水すすきの駅近くのビジネスホテルに宿泊したが、新型コロナウイルスの影響からか、深夜になると、換気のために開けた窓から人の声は聞こえなかった。

弁護士になり、1年3か月が経過した。この間に、大学院でともに勉強した友人は三度目の司法試験に挑戦し、別の友人は弁護士になることを諦めて企業に就職した。友人たちが人生の岐路に立って葛藤するなかで、私も本当にたくさんの経験をしたが、正直なところ、そういった「人生的」な葛藤はあまりなかったように思う。目の前にいる依頼者の最善を考えることで精一杯だったのだと思うが、札幌の静けさに当てられたのか、ふと考えてしまった。

私は、19歳の夏に、弁護士になることを決めた。弁護士になると決めた日、友人を呼び出して弁護士になると宣言したときのことは、いまでも鮮明に覚えている。ところが、そのとき思い描いていた弁護士像となると、途端に曖昧になる。おそらく、漠然とした格好良さに惹かれていたに過ぎなかったのだろうと思う。

それから大学に入学し、大学院を経て弁護士になるまで、多くの弁護士と出会ったが、私が変わらず弁護士に惹かれ続けたのは、出会った弁護士のそれぞれに、19歳のときに抱いた格好良さを感じていたからだろうと思う。ちなみに、当時出会った弁護士の印象の共通項は、①疲れている、②白髪が多い、③やたら熱い、というもので、私も相当な変わり者だったと思う。

いま、どのような弁護士になりたいか、と聞かれると、扱いたい法分野や理想的な依頼者との関係性は話すことができて、正面から理想の弁護士像について話すことは難しいように感じる。たとえば、依頼者から受ける報酬以上の仕事をする弁護士でありたいと考えているし、高層ビル弁護士*でありたいとも考える。私は欲張りなので、報酬以上の仕事をしながら、高層ビル弁護士でありたいとさえ考えている。しかし、どうもしっくりこない。

そんなことを考えていると、ひとつの仮説を思いついた。それは、私がいま、まさに理想とする弁護士になっているのではないかというものだった。理想とする弁護士になっているから、理想の弁護士像が曖昧になるという極めて安直な発想だが、意外と違和感がない。もちろん、自分の力不足に悔しさを感じるなど毎日のようにあるし、高層ビル弁護士とはほど遠い生活を送っている。しかも、弁護士は朝遅いなどと言われながら深夜土日関係なく仕事は来るし、まったく割に合わない。ところが、受けた仕事には全力を尽くしてしまうし、厳しい場面でも必死に食い下がる。むしろ厳しい場面であるほど、依頼者のために、という思いが強くなる。

そういえば、事務所に入所して半年ほど経ったころから、弁護士やスタッフに、フレッシュさが無くなった、気を抜いたときに目が死んでいる、白髪が多い(!) などと言われることが多くなった。なにも本人に言わなくてもよいのでは、と思うけれど、いつの間にか、19歳のときに思い描いた理想の弁護士になっていたのかもしれない。

*高層ビル弁護士とは、輝く金色のバッジを付けて、高収入で高層ビルに入居し、キラキラした生活を送る弁護士をいう(菅原草子「光と影を見た1年」LIBRA Vol.20 No.1-2 2020/1-2・47頁参照)。